

第119回 定期演奏会

## PROGRAM

## ショスタコーヴィチ:チェロ協奏曲 第1番 変ホ長調 op.107 (約30分) ★

Dmitry Shostakovich: Cello Concerto No. 1 in E flat major, op.107

第1楽章 アレグレット *Allegretto*第2楽章 モデラート *Moderato*第3楽章 カデンツァ *Cadenza*第4楽章 アレグロ・コン・モート *Allegro con moto*

— 休憩 (20分) — Intermission

## マーラー:交響曲 第1番 二長調「巨人」(約55分)

Gustav Mahler: Symphony No. 1 in D major, "Titan"

第1楽章 ゆっくりと、引きずるように *Langsam. Schleppend*第2楽章 力強い動きをもって、しかし速すぎずに *Kräftig bewegt, doch nicht zu schnell*第3楽章 厳粛に悠然と、引きずらずに *Feierlich und gemessen, ohne zu schleppen*第4楽章 嵐のように速く *Stürmisch bewegt*指揮:カーチン・ウオン *Kahchun Wong, Conductor*チェロ:アントニオ・メネセス *Antonio Meneses, Cello* (★演奏曲)管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2019 11/22(金)・23(土・祝)・24(日) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金  
(舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人 日本芸術文化振興会これさえ  
見れば  
わかる!

## 今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論)

## ショスタコーヴィチとマーラー 超個性の対決

プログラムの第1部に登場するのは、ソビエトで活躍したショスタコーヴィチ。先月の定期で聴いたプロコフィエフと並ぶ、20世紀ロシアの音楽界に君臨した大作曲家である。今日演奏されるのは、彼が残した2曲の「チェロ協奏曲」の最初のもので、「第2番」に比べれば軽快なイメージが強い。第4楽章ではスターリンが好んでいたグルジア(ジョージア)の民謡「スリコ」(YouTubeでも聞ける)がパロディ化されているという指摘もある(注1)。

後半に登場するのは、ドイツ後期ロマン派の大作曲家マーラー。彼の交響曲の中でも最も広く親しまれている「第1番《巨人》」を聴く。当時20歳代後半だったマーラーが、若い情熱をいっぱいにつづけた名作である。ホルン7本を含む大編成のオーケストラが織り成す壮大かつ神秘的な世界が聴きもの。第4楽章冒頭は、かつて「ニュース映画」が華やかなりし頃、地震・暴動・火事・洪水などの災害場面では必ずBGMとして使われていた音楽だ。

(注1)ローレル・ファイ著「ショスタコーヴィチ ある生涯」(藤岡啓介・佐々木千恵訳) アルファベータ刊

## 必聴POINT

ライター  
おすすめ!!

ショスタコーヴィチ:チェロ協奏曲 第1番 変ホ長調 op.107

## 《作曲家特有のアイロニーと深い叙情美》

第1楽章と第4楽章は軽快で躍動的だが、底抜けの明るさではなく、ショスタコーヴィチが多くの作品で聞かせているアイロニー(皮肉)感をも湛えている。第2楽章の沈潜した美しい叙情も、この作曲家ならではの世界だ。第3楽章は独奏チェロのモノローグ。

マーラー:交響曲 第1番 二長調「巨人」

## 《「巨人」の原語は「Giant」でなく「Titan」》

第1楽章序奏の最初に木管楽器がためらいがちに響かせる4度の音程が、全曲のいたるところに現われ、重要なモチーフになる。葬送行進曲風の第3楽章は彼の傑作の一つ。激烈な咆哮で盛り上がる第4楽章幕切れでは、ホルン奏者たちがいっせいに起立して吹く場合もある。

# PROGRAM NOTE

曲目解説 —  
演奏をより深く楽しむために  
東条 碩夫(音楽評論)



## ショスタコーヴィチ:チェロ協奏曲 第1番 変ホ長調 op.107

初演:1959年10月4日 レニングラード(現サンクトペテルブルク)

### 「雪解け」の時代に書かれた作品

1953年3月に独裁者スターリン首相が死亡すると、ソ連国内にも少し「雪解け」ムードが漂い始め、それまで知識人や文化人に加えられていた厳しい締めつけも緩んで来る。ショスタコーヴィチもそれに敏感に反応し、「交響曲第10番」を作曲、それまで発表を控えていた弦楽四重奏曲の「第4番」と「第5番」を公開初演させた。かつては形式主義的と非難されていた「第8番」と「第9番」の交響曲も公然と絶賛されるようになる。1957年には「血の日曜日」事件を題材にした「交響曲第11番《1905年》」をも作曲初演した。だが、長い苦悩の時代を体験して来たその作風は、もはやかつての大胆奔放な色合いのものではなく、翳りを帯びたものになっていた。

そうした1950年代の作曲活動を締め括る作品が、この「チェロ協奏曲第1番」である。

### 初演はあの有名なロストロポーヴィチ

1959年6月6日、彼はその新作について、こうコメントを発表した——「第1楽章アレグレットは、ひょうきんな行進曲で、すでに書き終えた……かなり前からあたためていたものだが、プロコフィエフの交響的協奏曲を聴いて魅了され、このジャンルで力試しを

してみたいという気持になった」(注2)。

初演したチェリストはロストロポーヴィチで、ムラヴィンスキー指揮するレニングラード・フィルとともに演奏、大成功を収めた。またロストロポーヴィチは11月6日にフィラデルフィアで、オーマンディ指揮フィラデルフィア管弦楽団と協演して米国初演を行なったが、この時には、米国で開催されていた文化交流プログラム参加のためソ連音楽家代表団の一員として訪米中だったショスタコーヴィチも演奏会に出席するという珍しい出来事もあった。

曲は4つの楽章からなる。第1楽章は弾んだ4つの音符とリズムによる進行で、その軽快なリズムは以前の「第10交響曲」第3楽章でのそれを閑達に変えたものだ。第2楽章以降は続けて演奏されるが、第3楽章ではオーケストラが沈黙し、チェロのソロだけが演奏するという不思議な構成が採られている。解放されたようにオーケストラが加わり快走する第4楽章には、あの第1楽章のリズムの思い出も甦る。

(注2) 「ショスタコーヴィチ自伝」ラドガ(虹)出版所訳・刊

#### 楽器編成

独奏チェロ、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2(コントラバスーン持替)、ホルン、ティンパニ、チェレスタ、弦楽5部



作曲家プロフィール **ドミートリー・ショスタコーヴィチ(1906-1975)**  
*Dmitry Shostakovich*

プロコフィエフと並ぶ、20世紀ソビエト&ロシア最大の作曲家のひとり。当初は大膽不敵な作風で西欧楽壇からも注目を集めたが、その後スターリン政権による大粛清の時代に遭遇し、形式主義作風との烙印を押され、生命の危険に陥りかねない状況に追い込まれたため、心ならずも一時期、作風を転換してみせた。従って、特に中期の作品群には謎が多く、彼が創作にあたって当時何を考えていたか、その心理を考える議論が今日でもあとを絶たない。

## マーラー:交響曲 第1番 ニ長調 「巨人」

初演:1889年11月20日 ブダペスト

## 「巨人」という副題は現行版には無い

マーラーは、1888年10月からブダペスト王立歌劇場首席指揮者を務めるようになったが、この時に「交響詩」として完成したのがこの「第1交響曲」(所謂「ブダペスト稿」)だった。ただしこの稿は、現在は消失している。

彼はのち1893年、ハンブルク市立歌劇場の首席指揮者時代に改定を行ない、第2楽章に「花の章」を追加した5楽章版の「交響曲形式による音詩《巨人》」として演奏した(所謂「ハンブルク稿」)。副題の「巨人(Titan)」とは、ジャン・パウルの小説に因んだものであり、第4楽章(現・第3楽章には「葬送行進曲」、現・第4楽章には「地獄から天国へ」などといった副題も添えられていた。

だがマーラーはその後も曲の細部を何度も大きく改訂し、1896年にベルリンで演奏した際に第2楽章「花の章」を削除して現在のような4楽章版とし、また作品タイトルの「巨人」も含めて各楽章の副題も除いてしまった。従って今日演奏される「現行版」に「巨人」という副題を付けるのは、実は正しくないのだが、その言葉の親しみやすさもあって、今なお慣習として使われているというわけである。

ちなみに、この場合の「キョジン」は、通常の発音と違い、尻上がりに発音するのが、クラシック音楽界の通例だ。理由は不明だが、クラシックの「通」と思われたければ、とにかくそのように尻上がりに発音して見せることをお奨めしたい……。

## 劇的かつ神秘的、壮烈な起伏の大交響曲

現行版は、前述のとおり4つの楽章からなる。

第1楽章は夜明けの雰囲気連想させる長い序奏に始まるが、この中で木管群が繰り

返すカッコウのさえずりのような「4度音程」は、その後の各楽章における重要なモチーフになる。また第1楽章の第1主題は、1884年に書いた歌曲集「さすらう若人の歌」の第2曲「朝の野原をゆくと」を転用したもの。

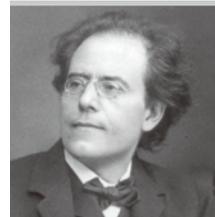
第2楽章は、エネルギッシュな力に満ちた曲想が中心となる。冒頭のチェロとコントラバスによるモチーフは、前述の「4度音程」による。

第3楽章は、これも4度音程によるティンパニの最弱音のリズムに始まる。コントラバスが奏でる主題をはじめとして、楽章全体を支配するミステリアスな雰囲気は全曲の白眉であろう。中間部には「さすらう若人の歌」の第4曲の最後の部分も現われて来る。後半での強弱とテンポが急激な変化を重ねる手法は、マーラーの激情的な性格を反映したものと言われ、のちのちまで彼の作品の特徴となる。

第4楽章は、激烈な主題で開始され、大きな起伏を繰り返しつつ進む。第1楽章の回想も出る。長大なこの楽章は最後に圧倒的な、まさしく「巨人的」なクライマックスに達し、天地を圧する音響の中に終結する。

## 楽器編成

フルート4(ピッコロ持替3)、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット4(E♭クラリネット持替2、バス・クラリネット持替)、バスーン3(コントラ・バスーン持替)、ホルン7、トランペット5、トロンボーン3、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ2、大太鼓、シンバル、タムタム、トライアングル、ハーブ、弦楽5部

作曲家プロフィール **グスタフ・マーラー (1860-1911)***Gustav Mahler*

19世紀の後期ロマン派から20世紀の近代音楽への移行期を形づくった大作曲家のひとり。「大地の歌」を含む11曲の交響曲(第10番は未完成)は音楽史上の金字塔だ。激しい性格を反映して、音楽にも魔性的な力が漲る。生前は指揮者としての名声の方がより高く、ハンブルク歌劇場のあとにもウィーン帝室歌劇場(現・国立歌劇場)総監督、メトロポリタン・オペラの指揮者、ニューヨーク・フィル音楽監督などを歴任して歴史に残る功績を挙げた。